
夏のこと 第一話

大澤海人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏のこと 第一話

【Nコード】

N8817M

【作者名】

大澤海人

【あらすじ】

ほんの少しだけ芸術肌でアウトサイダーな20代前半の若者たちの他愛も無い夏の出来事。

夏の夜に

夏の太陽はすっかり西の丘の向こうへ姿を隠し、ほのかに空を濃紺のグラデーションに染め上げている。

そよ風を感じると額にうつすら汗を滲ませていることに気づく。私は斜めにかけている革の縁取りがしてあるベージュのキャンバスバッグの中からハンカチを取り出し額に当てる。そのまま目を固くつむって眉間をハンカチ越しにつまむと、辺り一帯が風にざわめく木々たちの音で満たされているような気分になってくる。このまま風に全体重をゆだねてみれば風に乗って漂うことだってできる。さっと細く冷たい風が吹き付ける。こめかみに冷えた汗を感じると私はまた現実的な感覚に戻り、ふたたび空を見上げては胸に締め付けられるものを感じている。

既に30分ほどこうして同じ場所で人を待ち続けている。私は今、こじんまりした古い建物が並ぶ東西に抜ける路地の西側の入り口に立っている。この路地に連なっている殆どの家が通りに面して庭を持ち、すべすべとした木肌の華奢な楓や、どっしりと構えた松などの木々が、タール色に塗られた闇にとけ込みつつある木塀の向こうに覗いている。木塀は路地の先まで続き、5mほど行ったところでカクツと30度ほど傾斜してその先は見えなくなっている。今にも角の向こうから白いワンピースに飴色の革製のバレエシューズを履いた彼女が現れる想像をしては胸が高鳴っている。しかし彼女が、僕がぼんやり見つめている先の塀の影からひょっこり現れるのか、僕の背中側の路地に対して垂直に走っている静かな街路の方からやってくるのかは分からない。

街路の向こうから車が走ってくる。ヘッドライトに照らされ、ひよろつとした私の影が黒い塀に延びる。すっかり日が落ち、辺りが本格的な闇に包まれていることに気づかされる。車は私の前で特に

減速することもなく走り抜けた。急に強い光を捉えて暗闇の中で青緑色にくらんだ眼孔ですつと先で二つの点になった赤いテールランプを見つめる。

もつどのくらい待ったのだろうか。両足裏にうつすら痺れを感じ始めたので私は路地の中へ進み入ってみる。塀の前に積み上げられた一斗缶を見つけるとそれに軽くもたれるような姿勢になった。ふうとため息をついてすぐ向かいの瓦屋根の平屋をぼんやりと見る。この家も例のように黒い木塀に囲まれ、門の脇には杉板で作られた表札が掛けてある。表札のすぐ上にすっかりくすんだ真鍮製のランプが下がっているが、火はおろか口ウソくすら用意されていない。墨で名字が描かれているようだがこの暗さでは読めない。何故だか分からないが、このとき表札の文字を無性に確認してみたい欲求に取り付かれた。表札に近づこうと腰をあげたとき、路地の奥からタタタと軽い足音が響いた。何やら胸にざわめきを感じ、路地の向こうへ目を遣る。路地の奥の角のところで何やら小さな白い固まりがうごめくのが目についた。水の入ったバケツに白い絵の具を溶いたようなうつすらとした雲が月を覆っている。雲の隙間から漏れる月明かりは弱々しく、青白い光線がこの路地をぼんやりと照らす。足音の正体を照らす。そこには真つ白な猫がいた。眼孔に月光を取り入れ、メノウ石のような瞳でこちらを慎重そうに伺っている。猫はこちらに近づいてくるなり足にすりよってきた。首輪は見当たらないが飼い猫だろうか。寂しいのかい、思わず独り言が口から滑り出した。

彼女に背中の方から呼ばれて思わずびくつと肩が動いてしまった。先ほどから足下に居た猫も驚いたようで彼女の横を走り抜け民家の金網の下へ逃げてしまった。

「石浜くん。遅くなってごめんね。今日は、この間も言ったけど、集合展の」洋子はうつむき気味に肩で息をして、前髪を右手で分け

ながら言った。肩より少し長い黒髪は下ろしてあり、片方だけに細いフィッシュボーン編みがあり、小さな生成り色のリボンが付けてある。白いワンピースに革製のバレエ靴は最近彼女が頻繁にする組み合わせでよく似合っている。

「うん、制作が忙しいんだろ？いいんだよ。僕も初日に画廊まで行くよ」私は洋子の言葉を半ば遮るようにして言った。

「ほんとにごめんなさい。私、一度制作を始めちゃうと、制作モードに入っちゃうと・・・」相変わらずうつむき気味に申し訳なさそうにして口ごもっている。私が優しく助け舟を出してくれるのを待っているかのようだ。全く、こういうところがいじらしくて可愛い。洋子が瞬きをするたびに、彼女の長くて上を向いた睫毛の音がパタパタと聞こえてくるようで思わず見とれてしまった。

「分かってるよ。集合展楽しみにしてるよ」できるだけ優しい声色を努めた。洋子の声色があまりにも切なげだったので私はこの話題を終わらせることにした。

「お腹減ってるよね。作り置きで悪いんだけど、簡単な料理は用意してあるよ」

「ありがとう。お昼から何も食べてないから、もうお腹空いてるんだかなんだか」洋子はお腹を撫でながら言った。その動作があまりにも陳腐でキャラクター地味でいたから私は思わず笑ってしまった。彼女は少し驚いたように私の顔を覗き込んでから、彼女もまた同じように笑い出した。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8817m/>

夏のこと 第一話

2010年11月3日13時55分発行